

特集

ロービジョンと心理学

ロービジョンという言葉は、マスメディアでなかなか使われないこともあり日本ではあまり知られていません。視覚障害ですが盲ではなく、見えることは見えるけれど生活に支障がある目の状態を指す言葉で、これまで弱視と呼ばれていました。眼科医会の推定では日本には約170万人のロービジョンの患者さんがおられます。大多数は高齢で、自分がロービジョンであるということを意識していなかったり、分かっているもどうして良いのか分からずにいる場合が多いと考えられます。

2012年に、眼科医療の中にロービジョンケアが位置づけられ、保険点数化されましたが利用はまだ限られています。眼科の中にあっても、ロービジョンケアはいわゆる治療をせず、検査と拡大鏡などの補助具の選定と訓練、リハビリテーションへの紹介を中心とした内容で、異色の存在です。そこには、心理学がさまざまな形で関わっています。ロービジョンの患者さんたちに心理学が貢献している実態を書いていただくことで、心理学という学問分野の持っているさまざまな応用力と魅力を伝えます。

(小田浩一)